

第5章 総括

第1節 遺跡の広がり と 形成

これまでの調査成果と周辺の遺跡分布を合わせて、山野貝塚の時期的変遷について考察する。なお、山野貝塚から出土した最も古い時期と考えられる遺物は、西貝層外から出土した両面調整の尖頭器である。旧石器時代の尖頭器と考えられるが、下層調査を実施していないので、山野貝塚の旧石器時代については不明である。しかし、近隣の角山遺跡では下層の調査が実施され旧石器時代の石器ブロックが検出されていることから、山野貝塚にも旧石器時代の痕跡が認められる可能性があるものと考えられる。

最も古い時期の土器は、第1次調査の「B 14」グリッドで出土した前期前葉関山式と考えられる土器の底部片であるが、調査記録に「B 14」グリッドは存在せず、出土位置等の詳細は不明である。その他、第1次調査で阿玉台式土器の破片が1点出土しているのみで、山野貝塚で本格的に遺物が出土してくる後期初頭以前においては極めて生活の痕跡は薄い。

1 中期末葉～後期初頭（0段階）（第127図a）

山野貝塚において中期末葉～後期初頭の遺構は検出されていない。出土土器は合計で3kg弱であり、山野貝塚全体の土器出土量からすると極めて少ない。当該期の遺構は、山野貝塚北東部の浅い谷を隔てて隣接する伊丹山遺跡で検出されている。伊丹山遺跡から検出された遺構は、称名寺Ⅱ式期の住居2軒、後期初頭～前葉の住居1軒、後期初頭～前葉の小竪穴1基である。小竪穴の覆土上層からはシオフキ、イボキサゴ主体の貝層が検出されている。遺構は山野貝塚と反対方向の北東側に展開されると考えられ、さらに前述したように山野貝塚とは浅い谷を隔てて立地するという地形的な関係から、伊丹山遺跡は山野貝塚に先行する集落と位置づけられる。

後期初頭に先行する遺跡としては、両遺跡に隣接する角山遺跡で加曾利E式期の土器が出土しているが、遺構を伴う遺跡はない。発掘調査が実施されていないため詳細は不明だが、両遺跡の南側1kmに所在する宮ノ越貝塚では加曾利E式期前半の土器が比較的多く採集されている。しかし、宮ノ越貝塚は、後期前葉においては山野貝塚と並行して貝塚が形成されると考えられることから、山野貝塚に先行する伊丹山遺跡とは直接関係をもたない可能性がある。

このことから、伊丹山遺跡は後期初頭に突如としてこの地に営まれた集落と位置づけられる。ただし、山野貝塚からも当該期の土器が出土していることから、何らかの活動が行われていた可能性がある。

2 後期前葉（Ⅰ-1、Ⅰ-2段階）（第127図b）

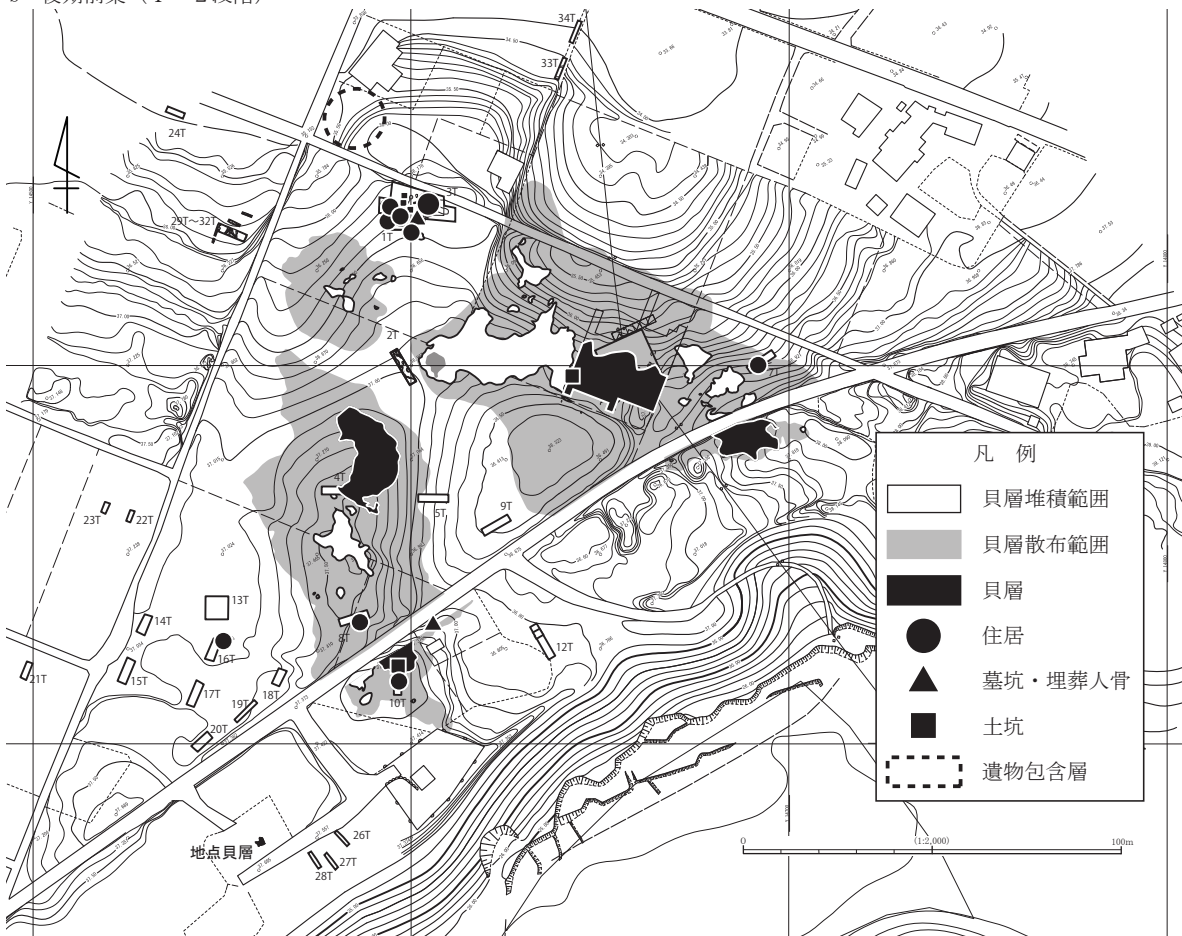
山野貝塚において本格的に集落が営まれはじめ、さらに貝層が形成される時期で、遺物の出土量が最も多くなる。

検出遺構は住居9軒、土坑15基である。分布をみると、西貝層の範囲内の10トレンチにSⅠ07、SK14、8トレンチにSⅠ09、東貝層の第1次調査範囲にSK15が分布し、主要貝層の範囲外の1、3トレンチ拡張部にSⅠ01～06、SK01～13、16トレンチにSⅠ14が分布し、比較的貝層の範囲外に多く分布する傾向にある。なお、10トレンチのやや北東側の貝層散布範囲と中央窪地の境界付近において昭和39年

a 後期初頭 (0段階)



b 後期前葉 (I-2段階)

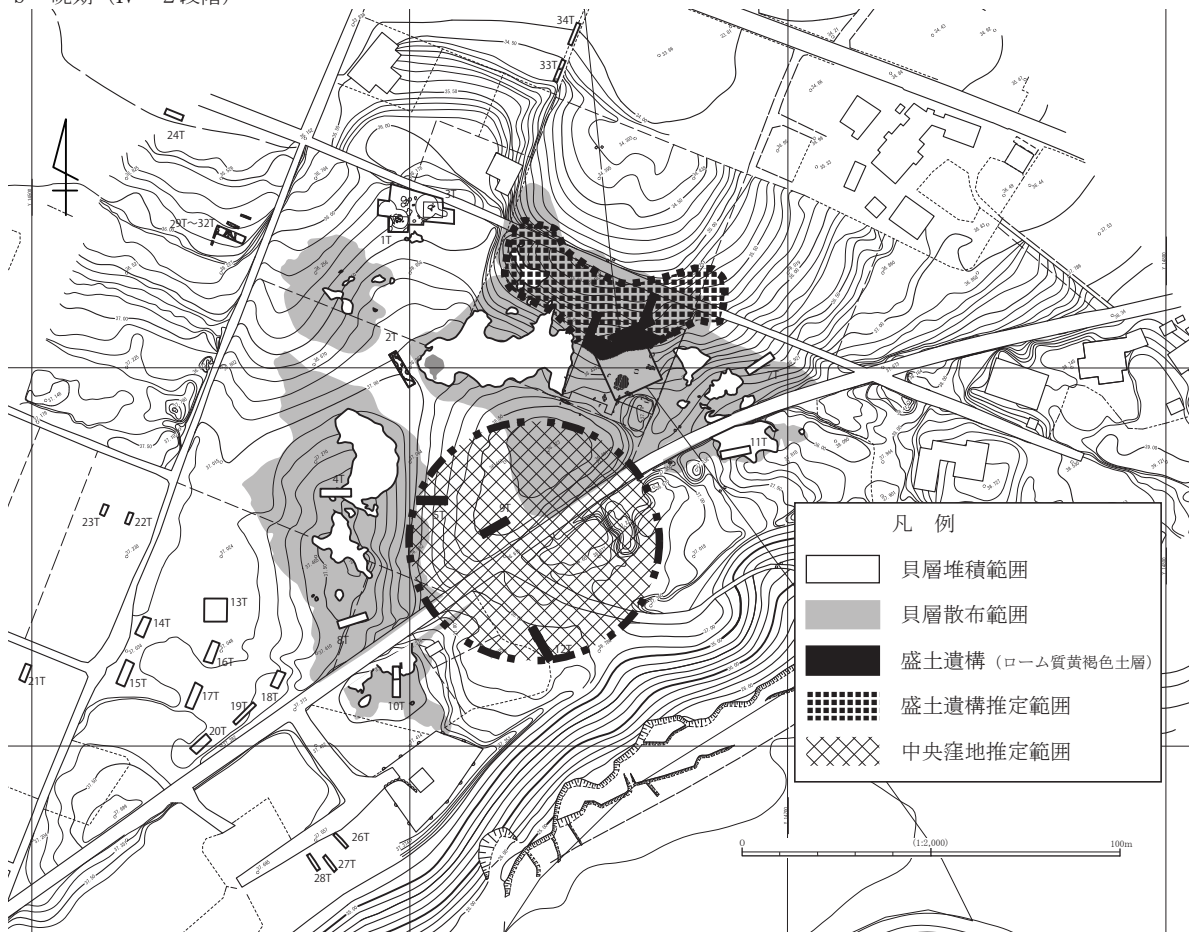


第127図 段階別遺構等配置図 (1)

a 後期中～後葉（Ⅲ段階）



b 晩期（Ⅳ-2段階）



第128図 段階別遺構等配置図（2）

に発見された人骨は年代測定の結果、堀之内2式期に相当するという結果が得られている。また、1、3トレンチ拡張区から検出されたS K 01は土器棺を伴う墓坑と考えられる。これらはそれぞれ住居と近接して検出されていることから、山野貝塚の堀之内式期においては、居住域と墓域が区分されていなかった可能性が考えられる。貝層の分布は、4、10トレンチの調査成果から、西貝層の主要な貝層については後期前葉に形成されたと考えられる。ただし10トレンチでは後期前葉の貝層を後期中葉の貝層が被覆する可能性もあるので、継続的に形成されたことになる。東貝層は、第1次調査範囲については中央窪地に近い内側において後期前葉の貝層が形成される。その他、S I 02、07の遺構内貝層および南西部地点貝層のように主要範囲外に小規模な地点貝層が形成される。南西部の地点貝層はさらに西側へ分布を広げる可能性もある。このように、後期前葉の段階から西貝層と東貝層が形成され始めていることから、集落の形成当初からいわゆる馬蹄形貝塚の原型が形成されたものと考えられる。土器の出土状況を見ると、第2次調査のトレンチごとの遺物出土量は、主要貝層の分布範囲において堀之内1式土器の出土量が多くなる傾向にある(第69図)。また、北貝層より北側の貝層範囲以外のI 12、J 12、I 13、J 13グリッドにおいて、堀之内1式土器が多く採集されている。なお、微小貝の分析では開放地生息種が多いことから、開けた環境で人間活動が活発であったことが指摘された。

以上を総合すると、後期前葉は山野貝塚の集落の開始時期で、さらに貝層も同時期に形成され始める。遺構や貝層は馬蹄形を呈する主要貝層範囲内から主要貝層範囲の外側の比較的広範囲に分布する傾向にある。

3 後期中～後葉(Ⅲ段階)(第128図a)

後期前葉から引き続き集落が営まれる。検出遺構は、住居4軒、土坑5基である。分布を見ると、主要貝層の間に位置する2トレンチにS I 10～12、S K 16～21、西貝層外縁部の4トレンチにS I 08が分布する。また、昭和38年に10トレンチ近隣の西貝層の中央窪地内側裾部付近で検出された埋葬人骨と、同じく10トレンチ付近で採集された人骨の年代測定の結果、加曾利B1～2式の年代が得られた。貝層の分布は、西貝層南端の10トレンチにおいて後期前葉の貝層を被覆する可能性のある貝層、同じく後期前葉の貝層を掘り込むピット内貝層が検出された。東貝層の第1次調査範囲内では後期前葉の貝層よりも北側の斜面側に貝層が堆積する。また、第1次調査範囲の谷頭付近には比較的規模の大きい純貝層が形成され、加曾利B式期と後期安行式期に形成されたと考えられる。土器の出土状況を見ると、第2次調査のトレンチごとの遺物出土量は、中央窪地内に位置する2、5、9、12トレンチでの出土量が多くなる傾向にある(第69図)。また、貝層範囲外南西部のI 22グリッドにおいて、器形復元可能な個体を含む加曾利B2式を主体とする土器が採集されている。なお、微小貝の分析では林内生息種が多くなっていくことから、人間活動が低下した可能性が指摘された。

以上を総合すると、後期中～後葉は主要貝層範囲から主要貝層範囲の内側にかけて遺構、遺物が分布する傾向にある。また、前時期に引き続き、西貝層南端部の中央窪地内側裾部において墓域が形成されていた可能性がある。ただし、東貝層に当たる第1次調査範囲の貝層は後期前葉よりも外側の斜面部側に形成される。なお、現在のところ第1次調査範囲に形成された後期安行式期の貝層が最も新しい時期の貝層となる。また、表採資料であるが、加曾利B2式期を主体とする土器が主要貝層堆積範囲外の南西部で検出されていることから、一部主要貝層外にも活動の場が広がっていたと考えられる。

4 晩期 (IV-1、IV-2 段階) (第 128 図 b)

現在のところ、明確な遺構は検出されておらず、貝層も形成されていない。しかし、特徴的な盛土遺構が認められる。それは第 1 次調査範囲の北側の緩斜面部で認められたローム質黄褐色土 (11 層) である。本土層はローム粒子を多量に含み、あたかも地山ローム層と見誤ってしまうような土層であるが、層中から縄文時代の遺物が出土するため人為的に形成された土層と捉えられる。土層中からは中期末葉加曾利 E IV 式～晩期中葉安行 3 c 式までの土器が出土している。型式別の出土土器の重量比率をみると、後期前葉～後葉の土器が多くなる傾向にあるが、山野貝塚において、後述する中央窪地部分の遺物包含層と並び、晩期の土器が最も多く出土する土層となる。このローム質黄褐色土層であるが、縄文時代後・晩期の拠点集落から検出される傾向にある。佐倉市井野長割遺跡では東側斜面に厚く堆積するローム質黄褐色土層が確認され、晩期に堆積したとされる (小倉 2010 他)。山野貝塚は井野長割遺跡に比べてローム質黄褐色土の厚さが半分程度であるが、晩期に斜面部に形成されるという点で共通する。このローム質黄褐色土の供給源として中央窪地が想定されることがある。その理由の 1 つとして、中央窪地のローム層上面が何らかの要因によって消失していることが挙げられている。本遺跡においても、その可能性を探るため中央窪地に相当する 12 トレンチでローム層以下を深く掘り下げ土層の観察を行った。その結果、立川ローム層最上層の III 層 0.2～0.3 m 程が消失していることが確認された。また、12 トレンチの深く掘り下げた部分のローム層最上面は、いわゆるハードローム層と呼ばれる硬質なローム層に相当するにもかかわらず、ソフト化していることも確認された。調査面積が狭小であり、この成果のみから判断することは危険であるが、第 1 次調査で検出されたローム質黄褐色土が中央窪地を掘削して得られた土層である可能性も考えられる。一方で、宙水による自然に形成された窪地を縄文人が選択して集落を営んでいたとする説もある (堀越 1995)。

なお、11 層のローム質黄褐色土層の下層には、部分的に 12 層の淡黒褐色土層が堆積している。本土層からは後期前葉～晩期前葉までの土器が出土しているが、11 層に比べ後期前葉の土器の割合が高くなる。ただし、遺存状況の良好な晩期前葉の土器が比較的多く含まれることから、11 層の堆積に先行して本土層も晩期に形成されたものと考えられる。前述したように、11 層がローム層の掘削による土の移動と考えるならば、その前段階にあたる 12 層は、ローム層上層に堆積していた縄文時代の表土層 (遺物包含層) を掘削したことで得られた土を移動した可能性も考えられる。第 1 次調査以外の土器の出土状況をみると、中央窪地に相当する 5、9、12 トレンチにおいて、晩期前葉の遺物が主体的に出土し、5 トレンチでは晩期中葉の土器も含まれる。

以上を総合すると、晩期の遺構は検出されないものの、中央窪地に遺物包含層、北東側緩斜面部に盛土遺構が形成され、北東側斜面部においてはローム質黄褐色土という特徴的な土層により、あたかも斜面を埋め立てているような状況を呈している可能性も考えられる。

5 遺跡の広がり と 形成

以上、時期ごとの特徴を概観してきたが、これらを総合して山野貝塚の広がり と 形成について考察する。

まず、山野貝塚北東側の浅い谷を隔てて隣接する伊丹山遺跡に後期初頭の集落が形成され、その後、後期前葉に対岸の山野貝塚の地に大規模な集落が形成され、集落形成の当初から馬蹄形貝塚の原型が認められる。なお、両遺跡が面する浅い谷は東京湾に流れ込む境川の支流の最上流域に相当し、両遺跡が海産資源を求めて行く際の玄関口になったものと考えられる。

山野貝塚の遺構等の全体的な分布傾向として、同時期の類似遺跡と同様に、後期前葉から晩期にかけて、遺構の分布や遺物の出土位置が貝塚の外側から内側に集約する傾向にある。ただし、後期前葉の遺構は貝層部分のみならず貝層の範囲外にも広がる。また、居住域と墓域も明確に区分されていなかった可能性もある。

一方で北東側緩斜面部においては後期前葉から晩期にかけて、中央窪地側から斜面部側へ向かい貝層及び土層が形成される。これはあたかも斜面部を埋め立てるかのようには北東側緩斜面を意識していたものと考えられる。また、動物資源の利用とも関係するが、少なくとも後期後葉安行式期までは緩斜面部に貝層を形成したが、晩期になると魚類も含め海産資源の利用が低調となり、貝層が形成されず、ローム質黄褐色土層で緩斜面部を埋め立てている。

以上のように、山野貝塚の集落の萌芽は後期前葉堀之内1式期で、集落形成と同時に貝塚も形成される。後期中～後葉にかけても集落が継続して営まれ、貝層も形成されるが、集落は徐々に内側に集約されてくる。

晩期になると貝層は形成されず、集落はさらに内側の中央窪地に集約され、晩期中葉にいたって集落が廃絶されたと考えられる。ただし、北東側の緩斜面部においてはこれとは異なり、内から外へ貝層や土層が形成される。このように、山野貝塚は、時期を経るにつれて外から内へ遺構等が遷移する同時期の類似遺跡と同様の構造を有しつつ、北東側の緩斜面部においては内から外へという反対方向の構造を有する遺跡となる。

第2節 出土遺物の特徴

第3章において各出土遺物について説明したが、山野貝塚の位置づけを考えるに当たり、今一度それぞれの種類ごとにその特徴をまとめてみたい。

1 土器

これまでの調査、表採資料を合わせて約1,677kgの土器が出土した。最も古い時期の土器は前期前葉関山式となるが前述したように調査記録にはないグリッドから出土しているため詳細は不明である。次に古い土器として阿玉台式土器が1点のみ出土している。中期末葉加曾利EⅣ式から出土量が増加し、堀之内1式の出土量が最も多くなる。堀之内1式は中段階から新段階に相当するものが多く古い時期のものは少ない。堀之内2式土器も少なからず出土しており、特に第1次調査のEグリッドでの出土量が多くなる。加曾利B式土器は、加曾利B1式が少なく、加曾利B2～3式が多くなる傾向にある。この時期に並行する異系統土器として、東北地方のいわゆる瘤付土器が数片出土している（第29図104・105他）。注記が不明ながら、山野貝塚から出土したとされる完形に近い注口土器も同時期の所産と考えられる（第38図224）。また、表土からの出土であるが、近畿地方の元住吉山Ⅰ式土器に類似する土器片が1点のみ出土した（第38図214）。後期安行式では、第33図161がほぼ全形を把握できるものであるが、これ以外は破片資料が多い。晩期安行式土器は前述の第1次調査範囲のローム質黄褐色土前後の層から比較的遺存状況の良好な土器が出土している。また、東北地方の大洞系の土器が多く出土ようになる（例えば第36図194）。その他、櫃原式文様を有する晩期前葉の土器片が2点出土している（第36図195、第49図25）。このように、山野貝塚には広域から土器が搬入されていることが理解される。

2 土製品

土製品は合計で234点出土した。土製円盤が土製品全体の約50%、土器片錘が約25%、土偶が約10%、その他耳飾等が含まれる（第70図）。土偶は山形土偶とミミズク土偶を主体としながらも、山形土偶以前の

土偶や晩期の中空土偶の破片も出土した。土版は1点出土した。いずれも破損しており遺存状況が良好なものはない。分布状況をみると、第1次調査範囲では段階別の貝層及び土層の分布と一致する。その他、土器片錘と土製円盤は時期的に補完関係にあり、土器片錘は後期前葉に多く、後期中葉以降になると土製円盤が多くなる（第73・74図）。分布状況をみると、第1次調査範囲では段階別の貝層及び土層の分布と一致する。それ以外にS I 02、06から土器片錘、2トレンチから土製円盤がそれぞれ多く出土した。なお、土器片錘の出土傾向については、市原市西広貝塚と同様な傾向を示す。調査面積あたりの出土量を比較すると、西広貝塚が476点（12,500 m²）に対し、山野貝塚が64点（740 m²）となり、1 m²あたりの出土量は山野貝塚の方が2倍以上多くなる。調査範囲の関係もあり、単純に比較できないが、山野貝塚の土器片錘の出土量は多いといえるだろう。

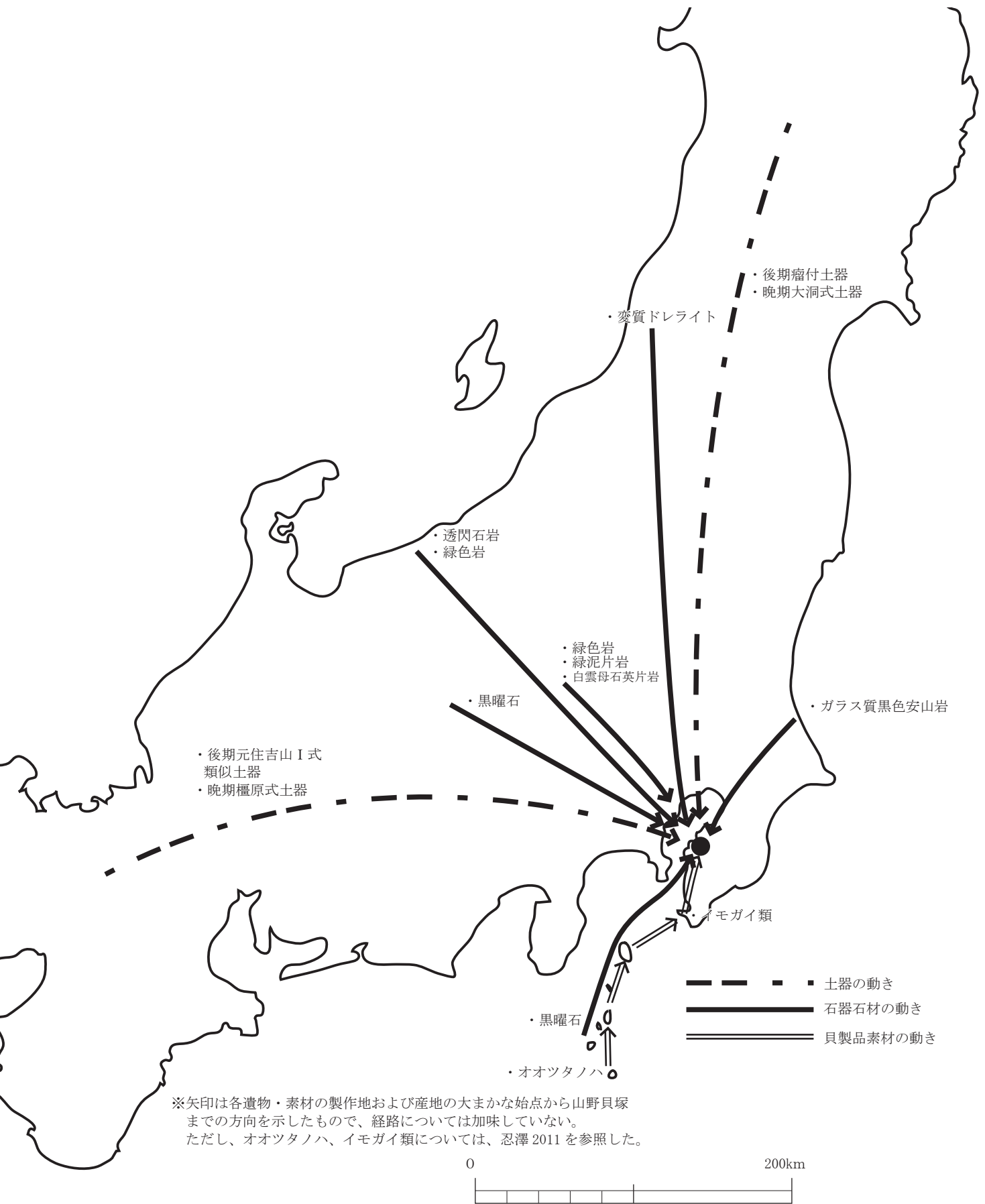
3 石器

石器は合計で643点出土した。内訳は、剥片石器170点、礫石器471点、その他・不明2点で、礫石器の中でも磨石・敲石、石皿の調理具、生産用具、砥石の加工具が主体なる。なお、表採や出土層位が不明なものが299点あり、段階ごとの組成変化をつかむことは困難であった。その中で、軽石製品は、72%がI-2段階で検出されており、特徴的な傾向を示す。軽石製品の用途として、研磨具や浮子等が考えられているが、仮に漁網具として利用されたとすると、同じく漁網錘と考えられる土器片錘がI-2段階に多いことと調和的となる。

使用石材について、石器石材については全点、礫については全体の3割の利用岩石種の鑑定を行い、石材が幅広い範囲からもたらされている可能性が示された。最も離れたところでは、磨製石斧は、本遺跡から200 km以上離れた新潟県北部の奥三面遺跡方面や同県南西部の糸魚川市から富山県方面の他、秩父方面の石材が利用されたものと推定された。器種ごとの主要な石器石材構成は、基本的には下総台地の同時代の遺跡と類似した傾向を示すが、一部に本遺跡の特徴的な様相が見られた。打製石斧では緑色凝灰岩類の存在から本遺跡対岸の横浜方面との関わりが指摘される。石鏃では、茨城県大洗産ガラス質黒色安山岩が利用されていることが判明した。古鬼怒湾周辺での同石材の出土例は多いが、柴田氏が石器石材を鑑定した限り下総台地北西部の遺跡では出土例がない。君津市寺ノ代遺跡においても黒曜石を主体とし、同石材は出土しないことから、本遺跡の特徴といえる。

4 骨角歯牙製品

骨角歯牙製品は145点検出された。内訳は、刺突具をはじめとする実用品が35点、垂飾、棒状加工品等の装飾品が25点、加工を持つもの（未成品、製品の一部など）が84点、不明1点である。刺突具は合計23点とある程度多く検出された。内訳は、ヤス状刺突具13点、銚頭1点、鏃9点となる。I-2及びIII段階で検出数が多く、I-2段階では鏃6点、ヤス状刺突具4点、銚頭1点の合計10点で、III段階では鏃1点、ヤス状刺突具1点、その他の刺突具3点の合計5点となる。段階別にみると検出数が少なくなってしまうが、I-2段階において、検出量が多くかつ形態に多様性が認められる。銚頭は、先端部側が欠損しているが、非常に精巧な作りである。銚頭は、イルカやクジラ等の海生哺乳類の捕獲に用いられた道具と考えられている。本遺跡では、東京湾東岸の湾奥部および東岸北部の遺跡に比べて、海生哺乳類が多く検出され、さらに、外洋性のマダイも比較的多く検出されていることから、外洋的要素の強い遺跡であることがわかる。1点の



第129図 山野貝塚に広域からもたらされた遺物の搬入概念図

みであるが、この銚頭の存在は、人工遺物の上からも本遺跡が外湾的な要素を持った遺跡であることを補強するものとなる。なお、銚頭は、近隣では永井作貝塚で釣針とともに1点発見されており、祇園貝塚でも出土しているようである。さらに南の外湾部の富士見台貝塚でも、狭小な調査面積ながら、11点出土している。これらは、東京湾の対岸に位置する横浜市称名寺貝塚あるいは東京湾東岸の湾口部に所在する館山市鉦切洞穴、館山市大寺山洞穴からその技術または物自体がもたらされたと考えられ、本遺跡は外湾的性格を有するこれらの遺跡との関わりが深かったものと考えられる。

5 貝製品

貝製品は33点検出された。内訳は、貝刃28点、貝輪2点、垂飾3点である。出土位置が判明している資料は、Ⅰ－Ⅱ段階とⅢ段階で検出された。Ⅰ－Ⅱ段階では、貝刃5点、イモガイ、ツノガイ製の垂飾2点が検出され、Ⅲ段階では、貝刃7点、貝輪2点、垂飾1点が検出された。貝輪は、オオツタノハ製とフネガイ科製が各1点検出された。オオツタノハ製は完形である。オオツタノハは貝素材の動きをよく理解することができる資料で、現在伊豆諸島の八丈島まで生息が確認されており、伊豆大島で貝輪が製作されたようである。そこで製作された貝輪が島伝いに北上し、房総半島を經由して東北、北海道まで運ばれたと推定されている（忍澤2011）。西広貝塚ではオオツタノハ製の貝輪が15点検出されており、他の貝製品とともにこれらの経由地と考えられる。山野貝塚では現在のところ1点のみの検出であるが、イモガイやツノガイ製の垂飾も少数ながら検出されていることを考え合わせると、山野貝塚もこれら「南海産の貝」を利用した貝製品の経由地の1つであった可能性もある。

以上のように、山野貝塚には比較的広範囲から遺物や素材がもたらされているが、それを概略的に示したものが第129図である。ここでは経路は加味していないが、このように広範囲から遺物や素材がもたらされていることは、山野貝塚が拠点集落であったことの証拠といえるだろう。

第3節 動物資源の獲得と利用

ここでは、山野貝塚から出土した動物遺体についてまとめると同時に、出土した人工遺物の様相等からその獲得と利用について考察する。

表78は、山野貝塚で検出された各種動物遺体の主要種の生息域、時期別の出土量、時期別のサイズ、それぞれの種類の捕獲・採取等に使用された可能性のある道具とその時期別出土量を一覧表にしたものである。また、検出例はほとんどなかったものの、当時確実に利用していたであろう植物質資源についても加えた。なお、比較する時期については、資料数の多い後期前葉（Ⅰ－Ⅱ段階）と後期中～後葉（Ⅲ段階）とした。

貝類を除く動物遺体全体の時期的な組成変化を概観すると、後期前葉から晩期にかけて魚類が減少する一方、イノシシ・シカが増加し、晩期になるとイノシシ・シカに集約される。これは、同時期の東京湾や古鬼怒湾の遺跡に普遍的に認められる傾向である。なお、鳥類と小型哺乳類は晩期以外においてほぼ一定の割合で含まれる。

1 貝類

貝類はイボキサゴ・ハマグリなどを主とする内湾砂泥底干潟の生息種が大部分を占める。これに対して汽

水性種はヤマトシジミ、淡水性種はイシガイ科が各1点確認されたのみであることから、本遺跡の貝類採集は海産種に対する強い選択性を示していると考えられる。こうした特徴は東京湾内湾東岸北部（都川～養老川流域）の貝塚と共通するものである。一方、本貝塚においてツメタガイがかなり高い比率を示す点は、東岸北部の貝塚にはみられない特徴である。その原因については、ツメタガイも他の主体種と同様に内湾砂泥底干潟の生息種であることから、東京湾内湾東岸の中での微妙な干潟環境・貝類群集の地域差を反映している可能性、あるいは貝類採集における選択性の違いを示す（＝本貝塚ではツメタガイを特に好んで採集していた）可能性などが考えられるが、この点は今後の課題である。

本貝塚の貝類は内湾砂泥底干潟に生息する種が大部分を占めることから、当時遺跡付近の海岸に広がっていた干潟で採貝活動が行われていたと考えられる。主体種であるイボキサゴは、現在小櫃川の河口に広がる盤洲干潟で大繁殖している。春の大潮の干潮時に沖合へ行き、ザルなどで砂ごとすくうと容易に採取することが可能である。縄文時代においても、カゴなどを用いて採取していたことが、アラムシロ、ウミナノ類の混獲から推定されている（西野 2004）。イボキサゴは、身を直接食することも可能であるが、身を取り出す労力に比して得られる肉量が少ないため、出汁的に利用されたという考えもある（西野 1999）。また、微小貝の分析（第4章第2節4）でも指摘されているように、意図的に貝殻を破碎して集積している例も認められ、食用以外の目的も含め大量に利用されたと考えられる。

貝類主要種のサイズ（計測可能資料がほとんど得られなかったマテガイを除く）をみると、ツメタガイ以外はいずれも後期前葉に比べて後期中～後葉のサイズが大きくなる。山野貝塚の貝層規模は、後期前葉に大きく発達したのち、中～後葉に縮小すること、また周辺の貝塚でも類似した傾向がみられることから、後期前葉における主要貝類の小型化は捕獲圧の影響によるものと考えられる。養老川水系の西広貝塚のハマグリ
の計測値（忍澤 2007）や都川水系の六通貝塚イボキサゴ、ハマグリ
の計測値（西野 2007）、小櫃川支流鍮水川水系の上宮田貝塚のハマグリ
の計測値（安井 2010）からも同様な結果が得られており、東京湾内湾東岸において共通する現象といえる。

表78 山野貝塚における動植物資源利用の様相

種類	主要種	生息域	資源出土量		サイズ 年齢		採取 捕獲 加工 道具	採取道具等 出土量		備考
			後期前葉	後期中～ 後葉	後期前葉	後期中～ 後葉		後期前葉	後期中～ 後葉	
貝類 MNI比	イボキサゴ	内湾砂泥底干潟	◎	◎	小	大	?	—	—	
	ハマグリ	内湾砂泥底干潟	○	○	小	大		—	—	
	シオフキ	内湾砂泥底干潟	△	○	小	大		—	—	
	マテガイ	内湾砂泥底干潟	△	△	—	—		—	—	
	ツメタガイ	内湾砂泥底干潟	△	△	変化なし	変化なし		—	—	
大型魚類 NISP比	クロダイ属	内湾	◎	◎	—	—	刺突具 土器片 軽石製品	○	△	
	スズキ属	内湾	◎	◎	最大60～70cmを含む	—		◎	×	
	マダイ亜科	外洋沿岸（→内湾深場にも来遊）	◎	○	最大50～60cmを含む	—		◎	×	
	コチノコチ科	内湾砂泥底	△	△	—	—		◎	×	
	フグ科	外洋沿岸～内湾	△	△	最大級を含む	—		◎	×	
小型魚類 NISP比	ニシン科	外洋沿岸表層→内湾に回遊	◎	◎	—	—	土器片 軽石製品	◎	×	
	アジ科	外洋沿岸表層→内湾に回遊	○	○	—	—		◎	×	
	キス属	外洋沿岸～内湾の砂泥底	△	×	—	—		◎	×	
	ウシノシタ亜目	内湾砂泥底	×	△	—	—		◎	×	
爬虫類 NISP比	ウミガメ類	外洋（→内湾にも来遊）	×	×	—	—	?	—	—	
鳥類 NISP比	キジ科	陸域	○	○	—	—	鏝?	△	×	
	カモ亜科	陸水域～海域	◎	◎	—	—		△	×	
	アビ科	海域	×	○	—	—		△	×	
	ウ科	沿岸域～汽水域	△	△	—	—		△	×	
小形哺乳類 NISP比	イヌ	陸域	◎	◎	—	—	鏝?	△	×	
	タヌキ	陸域	○	△	—	—		△	×	
	アナグマ	陸域	△	×	—	—		△	×	
	ノウサギ	陸域	△	△	—	—		△	×	
	ニホンザル	陸域	△	◎	—	—		△	×	
大型哺乳類 NISP比	ニホンジカ	陸域	◎	◎	成獣優勢 幼獣～成獣 が混在	成獣多数 幼獣～成獣 が混在	鏝	△	×	
	イノシシ	陸域	◎	◎	—	—	鏝	△	×	
海生哺乳類 NISP比	イルカ	外洋（→内湾にも来遊）	△	○	—	—	刺突具	△	△	
	クジラ	外洋（→まれに内湾にも来遊）	○	△	—	—		△	△	
植物質	根茎類	陸域	?	?	—	—	打製石斧 磨石類 石皿	×	×	
	堅果類	陸域	?	?	—	—		◎	◎	

凡 例
◎ 非常に多い
○ 多い
△ 比較的多い
× 少ない

なお、山野貝塚の南方約1 kmに所在する縄文時代中～後期の貝塚とされる宮ノ越貝塚では、表採資料ではあるが、汽水産のヤマトシジミが数十点採集されている。一方、山野貝塚ではヤマトシジミは1点のみしか検出されていない。宮ノ越貝塚の貝類は表採資料で年代や正確な組成が不明であるためきわめて不確実ではあるが、山野貝塚が後述する魚類の利用を含め海産資源への特化傾向を強く示すのに対し、宮ノ越貝塚では少なくとも貝類に関しては汽水域の資源も多く利用していた可能性も考えられる。近接する貝塚において利用される資源に相違があったとすれば、この地域の遺跡間関係を考えていくうえで興味深い現象といえる。なお、食用以外の貝類利用として、ハマグリとカガミガイの貝殻が貝刃、フネガイ科の貝殻が貝輪の素材として利用されている。

2 魚類

魚類は、現地採集資料と水洗選別資料で主要種が大きく異なる。現地採集資料では両時期を通じて、クロダイ属、スズキ属、マダイ亜科が多く、コチ科、フグ科がそれに続き時期的組成変化は認められない。水洗選別資料では、両時期ともニシン科が突出して多く、アジ科がそれに次ぐという基本的な組成は変化しない。

確認された魚類の生息域をみると、内湾性種または内湾域に來遊する回遊魚類が大半を占めている点では基本的に内湾東岸北部の貝塚と同傾向だが、内湾東岸北部の貝塚に比して外洋沿岸性のマダイ亜科が多く（詳細は後述）、また少数ではあるがマグロ属・カツオ、トビウオ科のような典型的な外洋性回遊魚類やコショウダイ属、カナガシラ属など岩礁域～その周辺に生息する種が認められることから、本遺跡の魚類組成は内湾東岸北部の遺跡よりも外湾的（湾口的）な様相をやや強く示しているとみてよい。一方、淡水魚類は極めて少なく、コイ科・ドジョウ科などがわずかにみられたのみであることから、本遺跡の魚類利用は貝類採集と同様に海産種に対する強い選択性を示していると考えられる。

魚類のサイズについては、スズキ属、マダイ亜科、フグ科などに大型の個体が目立った。現時点では悉皆的な計測は実施しておらず、本報告書で示したのは任意に抽出した大型資料の計測値のみであるが、特にフグ科については最大級の大きさと推定される個体もみられた。これらの特徴も本遺跡の外湾的要素を示すものと考えられる。

漁撈具としては、骨角歯牙製の刺突具、漁網錘と考えられる土器片錘、軽石製品が出土している。前節でも述べたように、刺突具については後期前葉において出土量、種類ともに多く、土器片錘、軽石製品も後期前葉の出土量が多い。これら後期前葉における漁撈具の豊富さは、先述した貝層規模や脊椎動物全体の組成から示唆される後期前葉の漁撈活動の活発さと調和的である。

なおエイ類の尾棘が刺突具として、またサメ類の椎骨が穿孔品（垂飾？）として利用されている。

3 爬虫類

ウミガメ類が検出された。東京湾内湾東岸北部の遺跡と比べると出土量は若干多い傾向にあり、また出土資料の大半を指骨が占めている点が特徴である。本遺跡では検出されていないが、東京湾東岸の縄文時代後期貝塚では指骨などを垂飾品として利用している（金子・忍沢 1986）ことから、本遺跡が素材の供給元のひとつであった可能性も考えられる。

4 鳥類

鳥類は、後期前葉～後葉を通じてカモ亜科が優占種であり、キジ科、ウ科がそれに続くが、中～後葉になると海洋に生息するアビ科の割合が高くなる。出土した鳥類には、おもに陸水域に生息するカモ類を主として、陸域～海域まで様々な環境に生息する種類が含まれることから、本貝塚における鳥類はこうした多様な環境で展開されていたと考えられるが、中～後葉におけるアビ科の増加は海域での鳥類の活発化を示唆する。鳥類の狩猟具としては、各種素材を利用した鏃が想定されるが、全体的に出土量が少なく、かつ表採資料が多いことから時期的な傾向は不明である。

最優占種であるカモ亜科の大部分の種とアビ科等の冬鳥は冬季のみ遺跡周辺に訪れる冬鳥であり、これらの狩猟は冬季に行われたと考えられる。一方で、周年遺跡周辺に留まる鳥（留鳥）については周年狩猟の対象となった可能性がある。これらの留鳥の中で、ウ科の幼鳥や若鳥の骨や産後約1か月間のみ雌鳥に形成される骨髄骨が検出されたことから、ウ科については繁殖地での狩猟がおこなわれた可能性がある。

なお、鳥類の長管骨は管状垂飾品等の素材として利用されている。

5 小型哺乳類

イノシシ・シカ以外の小型哺乳類はイヌが最も多い。イヌを除く狩猟対象獣は、時期不明資料を含めた全体的組成としては、タヌキが最も多く、ムササビ、アナグマ、ノウサギ、ニホンザルと続く。他の遺跡に比べてノウサギとムササビの比率が逆転しているが、それを除けば、東京湾東岸の後期遺跡の一般的な傾向と類似する。時期別にみると、後期前葉ではタヌキが最も多く、アナグマ、ノウサギ、ニホンザルも比較的多いものに対し、後期中～後葉にはニホンザルが多く、タヌキ、ムササビが比較的多くなる。

なお、小型哺乳類（詳細な同定は未了）の下顎骨が垂飾として利用されている。

6 イノシシ・シカ

イノシシ・シカは両時期を通じて哺乳類の優占種であり、シカが優勢である。下顎骨の歯の萌出・交換状態による年齢構成をみると、イノシシは幅広い年齢が混在しているのに対し、シカは、後期前葉は成獣が優勢で、後期前葉～中葉は幼獣と成獣が拮抗し、後期中～後葉になると成獣が圧倒的に多くなる。部位組成については、イノシシは東京湾内湾東岸北部の同時代貝塚の傾向と概ね一致するのに対し、シカは全体的に寛骨が多い点など特異的な様相を呈する。その原因については今後の課題であるが、本遺跡ではシカの解体様式などが東岸北部とは異なっていた可能性も考えられる。

イノシシ・シカは食用目的以外にも、骨・角・歯牙が製品の素材として多用されている。イノシシは犬歯、切歯、腓骨が鏃や刺突具、錐、へら状製品の素材として利用されている。シカは鹿角、下顎骨、中手・中足骨、脛骨が様々な器種の素材として利用されており、特に鹿角は鏃、髪針、弭、棒状製品、へら状製品、垂飾と多用される。また、下顎骨の先端部を擦り切り切断した破片も特徴的に認められる。なおシカの中手・中足骨には縦方向に分割されたものが多く確認された。このことは本遺跡においてシカ中手・中足骨を素材とした骨製品の生産が活発に行われていたことを示唆するが、実際の出土資料をみると中手・中足骨製品はそれほど多くはない。その原因については今後の課題だが、本遺跡で粗割りされた中手・中足骨が素材として外部に供給されていた可能性、あるいは本遺跡における中手・中足骨製品の消耗率が著しく高かった可能性も考えられる。

7 海生哺乳類

イルカ・クジラ類が同定された。時期別にみると、後期前葉はクジラ類が優勢であるのに対し、後期中～後葉はイルカ類が優勢となるようである。これらのイルカ・クジラ類の出土量は内湾東岸北部（西広貝塚以北）の同時代貝塚よりもかなり豊富である。狩猟具として、銛頭を含めた刺突具が検出されているが、大型クジラ類については、これらの刺突具で捕獲することは困難と考えられることから、漂着した死体等の骨を利用したとみた方が妥当であろう。なお、クジラ類の骨は垂飾の素材として利用されている。

第4節 東京湾東岸における山野貝塚の位置づけ

1 山野貝塚の性格

まず、これまでの内容をまとめ、山野貝塚の性格について考察する。

山野貝塚は、東京湾（奥東京湾～外湾）東岸のほぼ中間に位置し、縄文時代後・晩期の貝塚が連続的に分布する奥東京湾～内湾域の中では最南部に位置付けられる貝塚のひとつである（第2、131図）。

集落の開始時期は後期前葉堀之内1式期で、集落開始段階から遺跡の東西に貝層が形成され、馬蹄形を呈する貝塚の原型が認められる。住居をはじめとする遺構は、馬蹄形を呈する貝層よりも外側に形成される傾向にあり、出土遺物の上からもこの堀之内式期が山野貝塚の集落が最も盛行した時期といえる。動物遺体の様相をみると、貝類はイボキサゴが圧倒的に多く、次いでハマグリが多く、シオフキ、マテガイ、ツメタガイが比較的多く利用される。これら主要貝類のサイズは、マテガイとツメタガイを除き、後の時期より小さいことから、貝類については捕獲圧が働いていた可能性がある。魚類は出土量が多く、種類も豊富で、生息域も沿岸域から沖合までと多様である。漁撈具と考えられる土器片錘が多量に出土し、また同じく漁撈具と考えられる軽石製品も他の時期に比べると多く出土し、銛頭を含め刺突具も比較的多く出土している。これらの特徴は、後期前葉の漁撈活動が活発であったことを物語る。

後期中葉以降になると、微小貝類の分析からは若干人間活動が低調となってきたと想定されているが、後期後葉安行1、2式まで引き続き貝層が形成され、集落が営まれてきた。後期中～後葉の貝層は、西貝層南端のピット内貝層と北東側緩斜面部で確認されている。出土遺物については、後期中～後葉は後期前葉に比して出土量が少なくなるが、土偶、石棒・石剣等の祭祀的な遺物の出土量が多くなる。また、1点のみではあるが、加曾利B式期に並行する近畿地方の元住吉山I式土器に類似する土器が出土しており、比較的多く出土した東北地方のいわゆる瘤付土器とともに、本遺跡が広く他地域と交流をしていた証拠となる。動物遺体については、貝類組成は後期前葉と変化はないが、主要種であるイボキサゴ、ハマグリ・シオフキは後期前葉よりも大型の個体が多く採取される傾向にあることから、捕獲圧の緩和が示唆される。魚類も組成は後期前葉とほぼ同様であるが、脊椎動物遺体全体に占める魚骨の割合が低くなることから、魚類利用が低調化してきた時期ともいえる。

晩期になると明瞭な遺構は検出されなくなる。また、貝層も形成されず、動物遺体もシカ・イノシシに集約される傾向にあり、海産資源の利用が著しく低下してくる。遺物は中央窪地と北東側の緩斜面部分で多く出土している。特に北東側緩斜面部分では、ローム質黄褐色土というローム層由来と考えられる盛土遺構から多量に出土することが特徴である。ローム質黄褐色土の供給元については、中央窪地の調査成果から、中央窪地を掘削して斜面に土砂を移動した可能性を指摘した。盛土遺構や中央窪地の出土遺物をみると、関

西地方の晩期前葉樞原式文様を有する土器片が2点出土した。また、東北地方の大洞系土器も比較的多く出土することから、後期中～後葉に引き続き、本遺跡が他地域との幅広い交流を行っていたことが示唆される。その後、晩期中葉前浦式土器の出土を最後に縄文時代の遺物が認められなくなることから、少なくとも晩期中葉が山野貝塚の終焉の時期と考えられる。

また、遺跡からは数多くの石器やその素材となる礫が出土しているが、石器の素材となる石材に関しては近隣で採取されたものはわずかで、遠くは200 km離れた新潟県の石材や、海を隔てた伊豆諸島、さらには当該地域の同時代の遺跡からの出土例が少ない茨城県大洗産のガラス質黒色安山岩など多様な石材が利用される。貝層からはイボキサゴ、ハマグリを主体とする貝類やクロダイ属、スズキ属、マダイ亜科などの大型魚類、ニシン科を主体とする小型魚類、陸域から海域まで幅広く生息するカモ亜科をはじめとする鳥類、シカ・イノシシをはじめとする哺乳類遺体が数多く発見され、多様な環境に生息する動物を利用していたことが理解される。外洋性のマダイ亜科が多いこと（詳細は後述）や岩礁性のコシウダイ属などが含まれることから、魚類はやや外湾（湾口）的な様相を示す。

以上のことから、山野貝塚は後期前葉～晩期中葉まで営まれる集落で、後期前葉～後葉にかけては馬蹄形に展開する貝塚が形成される。遺物の出土量も豊富で、実用品の他、土偶、石棒・石剣、独鈷石、各種装飾品などの祭祀的な遺物も多く出土する。動物遺体をみると、とくに魚類組成において、内湾域と外湾（湾口）部の中間的な様相が認められ、銚頭が出土していることから、東京湾の湾口部や対岸地域との交流があったと考えられる。さらに、後期中葉～晩期にかけて関西地方や東北地方の異系統の土器がもたらされ、他地域

表79 小櫃川中～下流域における縄文時代後・晩期の遺跡の継続期間 ※実線は調査成果および表採資料による。破線は推定。

遺跡名	水系・位置	検出 遺構等	時期									
			中期後半	中期末葉	後期初頭	後期前葉	後期中葉	後期後葉	晩期前葉	晩期中葉	晩期後半	
山野貝塚	小櫃川右岸	遺構										
		遺物										
		貝層										
伊丹山遺跡	小櫃川右岸	遺構										
		遺物										
		貝層										
宮ノ越貝塚	小櫃川右岸	遺構										
		遺物										
		貝層										
祇園貝塚	小櫃川左岸	遺構										
		遺物										
		貝層										
永井作貝塚	小櫃川左岸	遺構										
		遺物										
		貝層										
伊豆島貝塚	伊豆島川	遺構										
		遺物										
		貝層										
向神納里遺跡	鎌水川	遺構										
		遺物										
		貝層										
嘉登遺跡	鎌水川	遺構										
		遺物										
		貝層										
上宮田台遺跡	鎌水川	遺構										
		遺物										
		貝層										
峰ノ台貝塚	矢那川	遺構										
		遺物										
		貝層										
蓮華寺遺跡	矢那川	遺構										
		遺物										
		貝層										
伊豆山台遺跡	矢那川	遺構										
		遺物										
		貝層										
葎ヶ作貝塚	烏田川	遺構										
		遺物										
		貝層										

との幅広い交流が指摘できる遺跡である。これらのことから、山野貝塚は小櫃川右岸における拠点集落として位置づけることが可能である。

2 小櫃川中～下流域周辺における山野貝塚の位置づけ

次に、山野貝塚が所在する小櫃川中～下流域周辺における山野貝塚の位置づけについて考察する。

小櫃川中～下流域の縄文時代後期と晩期の遺跡分布を示したのが第130図で、遺構が検出された主要な遺跡の継続期間を示したものが表79である。第130図は、遺構が検出された遺跡、貝層が検出された遺跡、遺物のみが検出された遺跡に分けてプロットしている。

小櫃川右岸

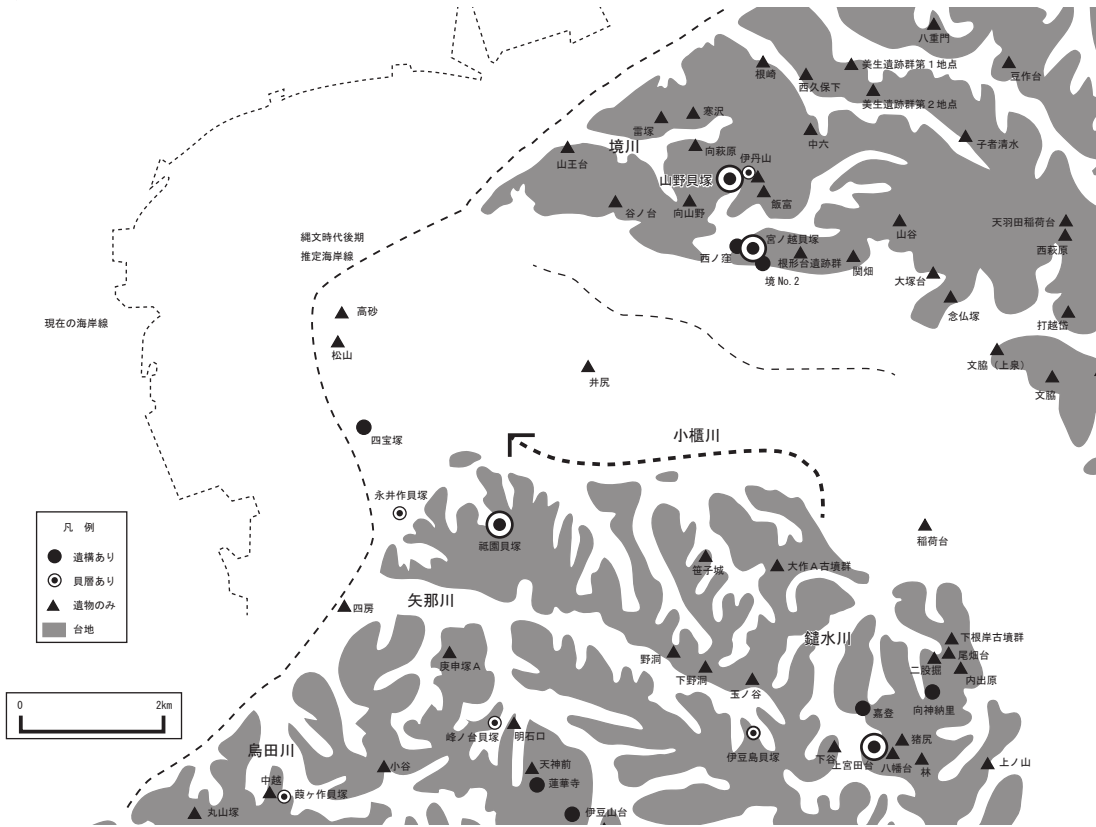
山野貝塚が所在する小櫃川右岸は両時期を通して遺構が検出される遺跡がきわめて少ない。袖ヶ浦台地全般をとおしていえることであるが、縄文時代早期の遺跡数は非常に多いが、前期になると遺跡数が少なくなり、袖ヶ浦市域では豆作台遺跡と文脇遺跡でのみ住居が検出される。続く中期も遺跡数が少なく、袖ヶ浦市域の袖ヶ浦台地では住居が検出された遺跡はない。宮ノ越貝塚は、表採資料のみであるが、阿玉台式土器が少量検出され、加曽利E式土器が一定量検出されている。発掘調査が行われていないため詳細は不明であるが、宮ノ越貝塚が小櫃川右岸において中期の最も古い段階の集落になる可能性が考えられる。なお、宮ノ越貝塚はかつて貝層の分布調査が行われ、北側に開口する馬蹄形貝塚と考えられている（能城1990他）。阿玉台式から曾谷式土器がまで採集されていることから、その範囲内で貝層が形成された可能性が考えられる。宮ノ越貝塚に隣接する西ノ窪遺跡では堀之内式期の住居が1軒検出され、境No.2遺跡からは同じく堀之内1式期の土坑が検出されており、宮ノ越貝塚周辺は小櫃川右岸において後期前葉の遺跡が集中する地点といえる。一方、山野貝塚周辺は、後期初頭になると山野貝塚に隣接する伊丹山遺跡で称名寺Ⅱ式の集落が突如として出現する。小竪穴からは小規模な貝層も検出され、海産資源の利用も始まったようである。ただし、伊丹山遺跡からは後期安行式まで土器が出土するものの、集落としては称名寺式期を中心に堀之内式期までに限定され、堀之内式期になると山野貝塚に集落が移る。

山野貝塚は集落の開始当初から規模が大きく、併せて貝塚も形成され始める。小櫃川右岸の後期前葉においては、山野貝塚周辺と宮ノ越貝塚周辺に遺跡が集中し、後期後葉まで両遺跡が継続すると考えられる。宮ノ越貝塚が中期後半から継続して集落が営まれていた可能性が高いのに対し、山野貝塚は後期初頭に突如として出現した伊丹山集落の後継と考えられることから、両遺跡は別集団によって営まれた可能性が高い。

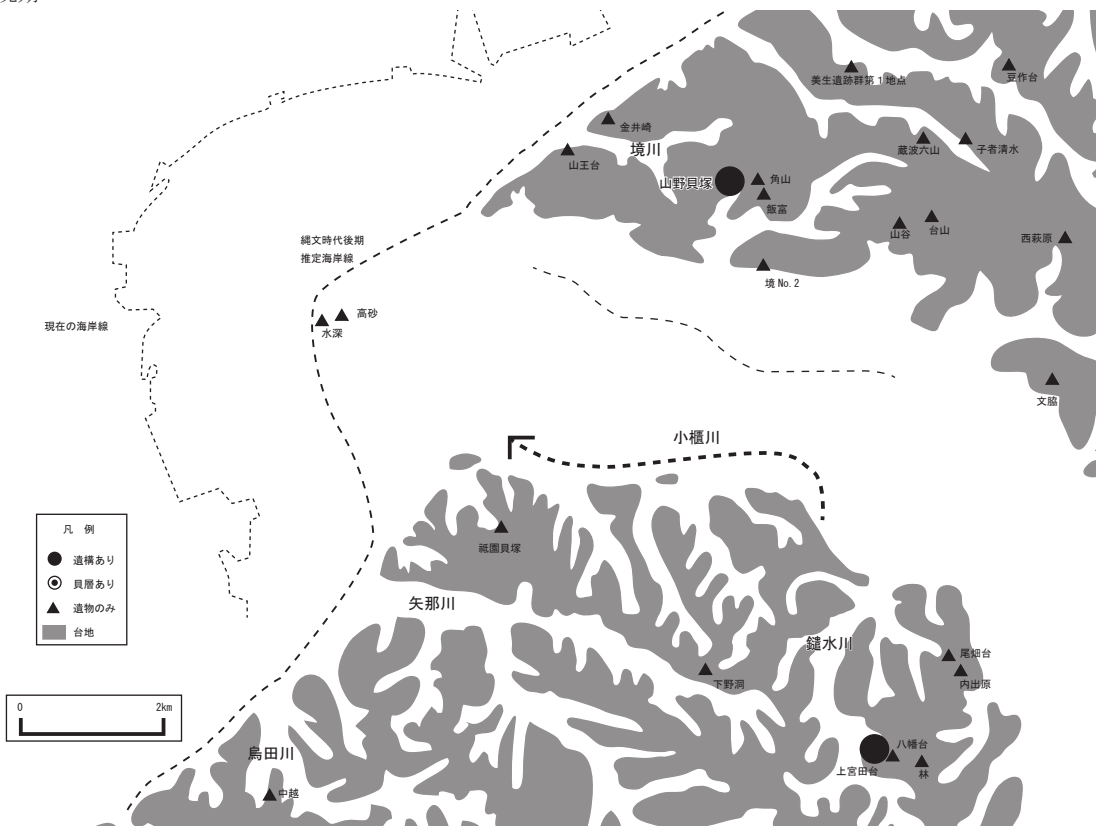
両遺跡は1kmの近距離に位置しており、生活領域は重複していた可能性が高い。しかし、両遺跡から検出された貝類の組成をみると、いずれも海産の貝類が主体となるものの、宮ノ越貝塚においては、表採資料のため不確実ではあるが、汽水産のヤマトシジミがみられたのに対し、山野貝塚は発掘調査をしたにも関わらず1点のみしか検出されていない。また、山野貝塚の淡水魚の利用は極めて低調である。このことから、山野貝塚では境川を下り直接海に出て海産資源を利用していたのに対し、宮ノ越貝塚は海産資源を主体的に利用しながらも小櫃川河口域の資源も利用していた可能性も考えられる。これら両遺跡の関係性はこの地域の社会を考えていくうえで鍵となる問題であり、宮ノ越貝塚の実態解明を含め、今後さらに究明を進めていきたい。

晩期になると遺跡の規模が縮小するものの、山野貝塚は継続して集落が営まれるのに対し、宮ノ越貝塚の集落は継続しないようである。山野貝塚では後期中葉以降祭祀遺物が多く検出されるようになり、また晩期

a 後期



b 晩期



第130図 小櫃川中～下流域周辺における縄文時代後・晩期遺跡分布図

になると北東側斜面にローム質黄褐色土を移動する行為も認められる。山野貝塚におけるこれらの事象が集落の統合を促した可能性もあるのではなかろうか。宮ノ越貝塚については表採資料のみのデータであり、今後さらなる検討が必要となってくるが、小櫃川右岸において山野貝塚と宮ノ越貝塚は後期の拠点集落と考えられ、山野貝塚については晩期まで長期的に継続して集落が営まれた。

小櫃川左岸

ここでは小櫃川の南側に位置する矢那川と烏田川流域の遺跡についても併せて考えていく。後期に先立つ中期段階の集落としては、後・晩期まで継続する祇園貝塚が挙げられる。詳細は不明な点が多いが、腰飾を伴う人骨が検出された加曾利E式期の住居や関西地方の土器が検出されている（能城 2000）。矢那川の上、中流域には中期の拠点集落が数多く存在する。第 130 図の南側の欄外になるが木更津市花山遺跡は勝坂、阿玉台式期（實川他 1988）、木更津市台木A遺跡は加曾利E式期の集落となる（安藤 1995）。第 130 図の最南部に位置する木更津市伊豆山台遺跡は阿玉台式期の終末から後期初頭称名寺II式までの住居が検出された環状集落で、当地域においては最も大規模な集落となる（上守他 2000）。確認調査のみであるが、峰ノ台遺跡でも中期後半の住居が検出されている（加納 1998）。小櫃川中流域の支流である鑓水川流域の向神納里遺跡では加曾利EⅢ～Ⅳ式期の住居が検出されている（稲葉 1995）。祇園貝塚の時期ごとの詳細は不明であるが、矢那川流域の中期の遺跡群は下総台地の同時期の遺跡と同様に、中期後半加曾利EⅢ式期以降には規模を縮小していく傾向にある。

その後、それらの遺跡に近接して、中期末～後期前葉に限定される遺跡が出現する。矢那川流域では伊豆山台遺跡に近接する木更津市蓮華寺遺跡（野口 1988 他）が、鑓水川流域では嘉登遺跡がそのような遺跡に相当する（西原 1994 他）。

後期前葉になると再び遺跡数が増加し、貝塚を伴う遺跡が認められるようになる。小櫃川下流域では中期から引き続き祇園貝塚が拠点集落として存在しており、環状を呈する貝塚が形成される。近接する永井作貝塚は低位段丘に立地する遺跡である（井上 2000）。両遺跡からは、銚頭、釣針をはじめとする骨角器が出土している。矢那川流域では峰ノ台貝塚で後期初頭～中葉までの地点貝層が検出されている。山野貝塚と同様に千葉県主要貝塚調査として確認調査が実施された遺跡で、貝層サンプルが採取されているが未分析である。矢那川の支流伊豆島川の上流に所在する伊豆島貝塚では斜面部から点列状の貝層が検出された（稲葉 1990）。鑓水川上流の上宮田台遺跡は中央窪地型を呈する大規模な集落で、晩期中葉まで継続して営まれる（安井 2010）。後期前葉から後葉の貝層が数箇所検出されており、特に北側斜面部においてまとまった貝層が検出された。烏田川流域の葎ヶ作貝塚は小規模な調査が実施され、後期初頭から後期後葉までの遺物が出土しており、後期前葉から後葉にかけての3箇所の地点貝層が検出された（光江他 2004）。これらの貝塚の貝組成は、東京湾内湾東岸の他の貝塚と同様にイボキサゴを主体種とし、ハマグリが準主体種で、シオフキ、マテガイ、ツメタガイを伴う。なお、本章第3節でも述べたように、上宮田台遺跡のハマグリは殻長計測値からは、後期前葉から後葉にかけてハマグリが大型化する結果が得られている（安井 2010）。村田川流域に所在する六通貝塚（西野 2007）や養老川流域に所在する西広貝塚（忍澤 2007）や山野貝塚も同様な傾向を示すことから、このことは東京湾東岸北部、南部の後・晩期の貝塚において普遍的な事象といえるのかもしれない。魚骨については、葎ヶ作貝塚では、スズキ類、サメ類、ダツ類、タイ類が検出されているようであるが検出量は少ないようである（光江他 2004）。上宮田台遺跡ではクロダイとタイ科合わせて3点が検出されたのみであるが、これは海岸から離れた内陸よりの立地を反映しているとも考えられる。（安井 2010）。

峰ノ台貝塚は全資料が分析されていないが、フグの出土量が多いことが指摘されている（加納他 1998）。

晩期になると遺跡数は激減し、上宮田台遺跡のみ継続して集落が営まれる。祇園貝塚の詳細は不明であるが、晩期の遺物が出土しており、さらに馬蹄形貝塚が形成されることから、晩期まで継続する集落であった可能性が高い。葎ヶ作貝塚と伊豆島貝塚については詳細な調査が実施されていないので不明確なところはあ
るが、小櫃川左岸においては、晩期にかけて東京湾沿岸部の祇園貝塚と内陸部の小櫃川支流の鍮水川流域の上宮田台遺跡に集落が集約されるようになる。なお、分布図南側の図示範囲外になるが、畑沢川上流域の三直貝塚は、盛土遺構を有し後・晩期をとおして継続的に営まれた大規模な拠点集落となる（吉野他 2006）。

これまで見てきたように小櫃川中～下流域周辺において、後期の段階では比較的遺跡数が多く、右岸においては山野貝塚と宮ノ越貝塚が拠点集落となり、左岸においては祇園貝塚、上宮田台遺跡の拠点集落の他、貝塚を伴う遺跡が複数存在する。

一方晩期になると遺跡が激減し、拠点集落が山野貝塚、祇園貝塚、上宮田台遺跡に集約される傾向にあり、それぞれ小櫃川下流域右岸、同左岸、同中流域左岸と分布が異なることになる。

山野貝塚の魚類組成が外湾的要素をやや強く示し、また、1点のみであるが銚頭という海生哺乳類や大型魚を漁獲するための刺突具が出土していることから、同じく銚頭や釣針などの漁撈具が出土した祇園貝塚や、永井作貝塚などの外湾部方面の遺跡とのつながりがあったことは確実である。さらに南海産のオオツタノハを素材とする貝輪が出土していることは、これらの一大経由地と考えられる養老川流域の西広貝塚との関わりがあったこともうかがわせる。これらのことから、東京湾東岸に沿った外湾（湾口）部から内湾部への文物の流通にあたって、山野貝塚はこれらが経由する集落であったと位置づけることが可能である。

3 東京湾東岸における山野貝塚の位置づけ

最後に、東京湾東岸における山野貝塚の位置づけについて考察する。

前述したように、東京湾東岸には縄文時代後・晩期の貝塚が多数所在している。その分布は第 131 図のとおりであり、奥東京湾地域から内湾東岸北部（西広貝塚以北）までは連綿とした貝塚分布がみられるのに対し、内湾東岸南部（山野貝塚以南）では分布がまばらとなる。これまでの分析の結果、山野貝塚はこの立地を反映して、検出された魚類組成が外湾（湾口）的様相を示すことが理解された。そこで、他の遺跡と比べてどの程度外湾（湾口）的な様相を示すかを把握するために、東京湾内湾東岸の都川以南から外湾東岸に所在する遺跡における魚類組成について比較する。対象とする遺跡は信頼性の高いデータが得られている以下の遺跡を利用した。

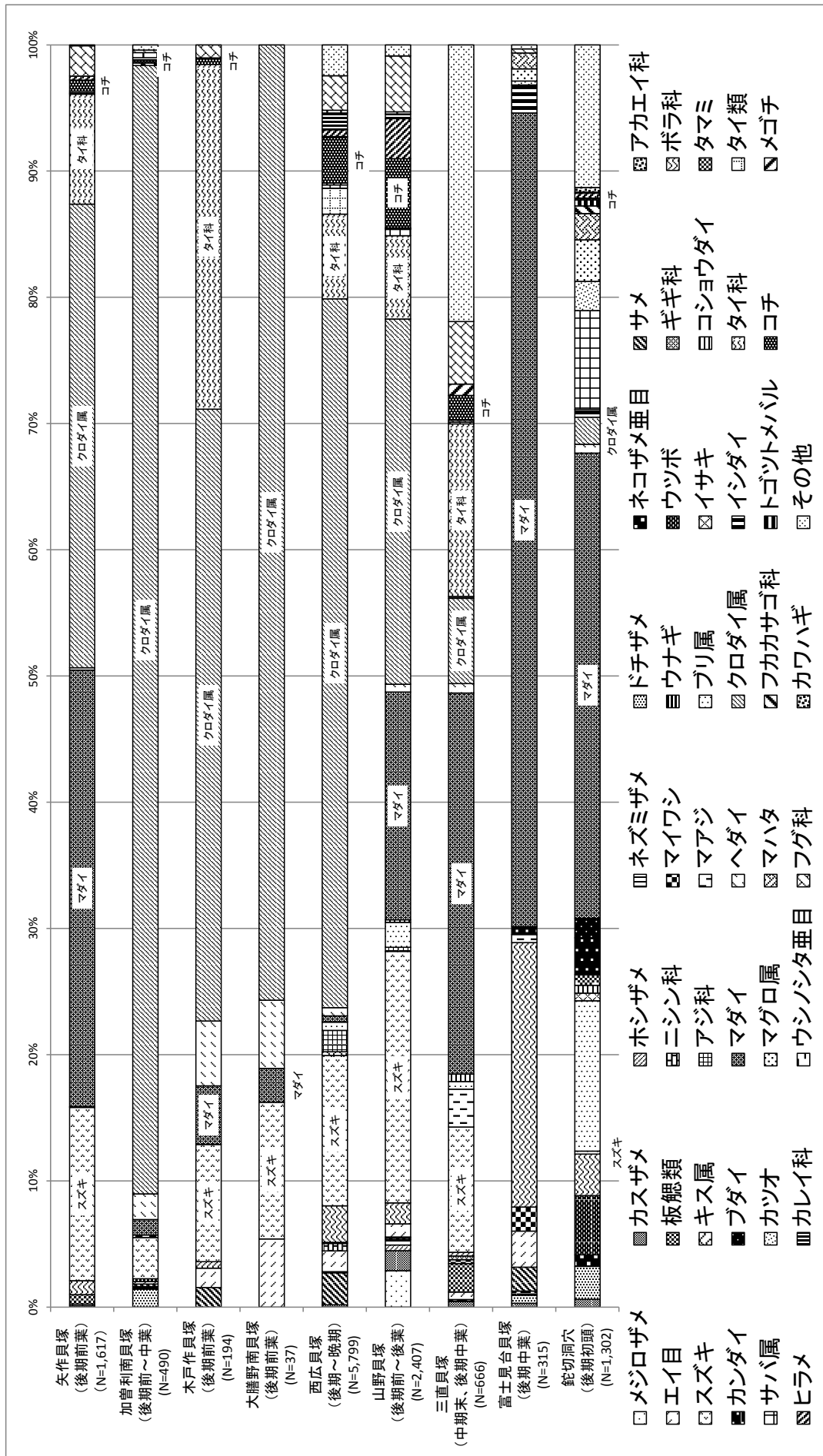
東岸北部：矢作貝塚（後期前葉：都川河口域、樋泉 1999）、加曾利南貝塚（後期前～中葉：都川中流支流谷奥、金子・牛沢 1980）、木戸作貝塚（後期前葉：村田川下流部支谷、小宮 1979）、大膳野南貝塚（後期前葉：村田川下流部支谷、樋泉 2014）、西広貝塚（後期～晩期：養老川下流、忍澤 2007）

東岸南部：山野貝塚（後期前～後葉：小櫃川下流）、三直貝塚（中期末、後期中葉：畑沢川上流、吉野他 2006）

外湾部：富士見台貝塚（後期中葉：湊川河口域、金子他 1964）

鉾切洞穴（後期初頭：館山湾南岸、金子他 1958）

分析の対象とする数値は、現地採集資料の同定標本数である。なお、対象遺跡すべてにおいて同定標本数



第132図 東京湾内湾東岸北部から外湾（湾口）部に所在する縄文時代後・晩期貝塚の魚類組成（現地採集資料のNISF）
 東岸北部：矢作貝塚（後期前葉；都川河口域、樋泉1999）、加曾利南貝塚（後期前~中葉；都川中流支流谷典、金子・牛沢1980）、木戸作貝塚（後期前葉；村田川下流部支谷、大膳野南貝塚（後期前葉；村田川下流部支谷、樋泉2014）、西広貝塚（後期~晩期；養老川下流、忍澤2007）
 東岸南部：山野貝塚（後期前~後葉；小瀬川下流）、三直貝塚（中期末、後期中葉；畑沢川上流、吉野他2006）
 外湾部：富士見台貝塚（後期中葉；湊川河口域、金子他1964）、鉾切洞穴（後期初頭；館山湾南岸、金子他1958）
 以上に基づいて作成

表80 東京湾内湾東岸北部から外湾（湾口）部に所在する縄文時代後・晩期貝塚の魚類組成（現地採集資料のNISP）

種類	矢作貝塚 (後期前葉) (N=1,617)	加曾利南貝塚 (後期前～中葉) (N=490)	木戸作貝塚 (後期前葉) (N=194)	大膳野南貝塚 (後期前葉) (N=37)	西広貝塚 (後期～晩期) (N=5,799)	山野貝塚 (後期前～後葉) (N=2,407)	三直貝塚 (中期末、後期中葉) (N=666)	富士見台貝塚 (後期中葉) (N=315)	鉦切洞穴 (後期初頭) (N=1,302)
メジロザメ						69			
カスザメ	2				11	38	3	1	8
ホシザメ						11			
ネズミザメ						10			
ドチザメ		7						2	34
ネコザメ亜目		1					1	1	12
サメ		1	3		144	3		6	
アカエイ科					6	2			
トビエイ科					84	12			
エイ目	2	1	3	2	94	25	4	9	
板鰐類	12						15		
ニシン科					33				
マイワシ							2	6	
ウナギ		1			6				
ウツボ									61
ギギ科							2		
ボラ科	18		1		165	40	2	66	43
スズキ	222	16	18	4	681	477	66		3
キス属					16				
アジ科					97	8			
マアジ		1					20	2	
ブリ属	1				37	47	4		155
イサキ									8
ゴショウダイ					2	5	4		8
タマミ									11
カンダイ								2	38
ブダイ									20
マダイ	559	6	9	1	27	432	201	203	480
ヘダイ	3	10	10	2	37	15	5		9
クロダイ属	594	438	94	28	3209	693	45		28
イシダイ							1	7	8
タイ科	141		53		384	158	91		
タイ類					117				
サハ属	1				15	12	1		102
カツオ	1					1		1	30
マクロ属	2				9	1		3	43
マハタ							1	4	27
フカカサゴ科		1				1			8
トゴツトメバル									6
コチ	14	1	1		205	131	13		2
メゴチ					5		6		
ヒラメ	5				30	76			5
カレイ科		1			77	9			
ウシノシタ亜目		2			12	4			1
フグ科	39	1	2		156	106	33	1	
カワハギ									5
その他	1	2			140	21	146	1	147
その他内訳									
アオザメ							1		
カタクチイワシ					1			1	
ヒラ						1			
トラウツボ									1
マアナゴ									3
アナゴ科					2				
フナ属					1				
ウグイ					2				
コイ科	1				4				
アユ					1				
ギバチ					4				
サヨリ属					2				
ダツ					4	1			
ベラ									4
アオブダイ									1
キダイ									2
メジナ									1
ソウダカツオ属		1							
メカジキ		1							4
ハシロウカジキ									3
マカジキ									1
オニカサゴ									1
オニオコゼ									2
ホウボウ									1
カナガシラ						3			
イシガレイ					5	1			
イシガキフグ									2
その他									121
不明							145		
真骨類					114				
同定不可						10			
未同定						5			
合計	1617	490	194	37	5799	2407	666	315	1302

東岸北部：矢作貝塚（後期前葉：都川河口域、樋泉 1999）、加曾利南貝塚（後期前～中葉：都川中流支流谷奥、金子・牛沢 1980）、木戸作貝塚（後期前葉：村田川下流部支谷、大膳野南貝塚（後期前葉：村田川下流部支谷、樋泉 2014）、西広貝塚（後期～晩期：養老川下流、忍澤 2007）

東岸南部：山野貝塚（後期前～後葉：小櫃川下流）、三直貝塚（中期末、後期中葉：畑沢川上流、吉野他 2006）

外湾部：富士見台貝塚（後期中葉：湊川河口域、金子他 1964）、鉦切洞穴（後期初頭：館山湾南岸、金子他 1958）

以上に基づいて作成

が5個未満の魚種についてはその他として一括した。

表80は、各遺跡の同定標本数をまとめた一覧で、第132図が表80に基づいて作成したグラフである。なお、グラフの上方にある遺跡は内湾東岸北部側の遺跡で、下にいくにつれて湾口部側の遺跡となる。

これをみると、東岸北部の遺跡においては、スズキ属とクロダイ属が主要な魚種となる共通性を示す。ただし、矢作貝塚は外洋性のマダイの割合が非常に高く、特異な様相を示す。山野貝塚においてもスズキ属とクロダイ属が主要な魚種となることに変わりがないが、マダイが一定の割合を占め、より外湾（湾口）側に所在する三直貝塚と類似した組成となる。さらに南側に所在する富士見台貝塚ではマダイが約65%を占め、最南端の鉈切洞穴でもマダイが最優占種となっている。このように、外洋性のマダイが組成に占める割合の変化により、その遺跡の外洋的要素の強弱が判断できるものと考えられる。グラフ全体を概観すると、西広貝塚と山野貝塚の間でマダイの割合が急激に変化することがみてとれる。

これまでの分析による山野貝塚の外湾（湾口）的な要素として、①魚類組成に占めるマダイの割合が高く、少数要素の中にも、外洋性のマグロ、カツオや岩礁周辺に生息するコショウダイ属、カナガシラ属が含まれること、②スズキ、マダイおよびフグ科に大型の個体が目立つこと、③イルカ類・クジラ類が多いこと、④1点ながら海生哺乳類の捕獲に用いられる銚頭が検出されたこと、が挙げられる。これらの要素と前述のグラフから読み取れる山野貝塚と西広貝塚間におけるマダイの割合の劇的な変化を考え合わせると、山野貝塚は「東京湾東岸に現存する最南端の大型貝塚」であると同時に、「東京湾東岸において外湾的要素を強く示す最北端の大型貝塚」という位置づけを与えることができる。すなわち、山野貝塚は、湾奥部および東岸北部と外湾部の中間に位置するという立地的な特性から、両自然環境で得られる要素を持ち合わせる遺跡であり、このような両要素を有する現存する大型貝塚は山野貝塚において他にないのである。

縄文時代を理解する上で「貝塚」は欠くことのできない遺跡である。東京湾東岸にはその貝塚が日本で一番多く所在しており、縄文時代を考えていくうえで重要な地域である。山野貝塚はその中でも湾奥部および東岸北部と外湾部の両要素を有する遺跡で、さらに良好な遺存状況から、東岸南部において今後も重要なデータを提供できる可能性のある唯一の遺跡であり、東京湾東岸の貝塚群のみならず縄文時代を考えていくうえでも重要な遺跡と位置づけられるのである。

何度も述べてきたように、山野貝塚は非常に遺存状況の良好な遺跡である。山野貝塚の貝層散布範囲の面積は8,055.3 m²（プランメータ計測値）で、これまでの発掘調査面積は880.1 m²である。発掘調査面積には貝層にかからない箇所も含まれるが、単純に貝層散布面積の約11%を調査したことになる。このわずかな調査面積ながら、これまで見てきたような重要な成果が得られたわけである。いまだ発掘調査や開発が及ばず保存されている部分には山野貝塚のみならず、東京湾東岸に所在する貝塚群を理解する上での重要な資料が眠っているはずである。今後の調査研究を見据えて、山野貝塚を適切に保護していかなければならない。

第5節 今後の保存活用について

今回これまでの調査成果を総括したことにより、山野貝塚が東京湾東岸における縄文時代の貝塚群を考える上で重要な遺跡であることが改めて理解された。

山野貝塚は遺存状況の良好な遺跡であり、未調査部分には東京湾東岸の縄文時代貝塚群を理解するための情報が豊富に残されていると考えられる。この状況を将来的に維持するために、国史跡の指定を受け恒久的に保存することが必須である。そのために、山野貝塚の重要性を明らかにするための調査研究を推進すると

ともに、その成果を広く市民に還元し、周知していく必要がある。そして将来的には袖ヶ浦市郷土博物館などの周辺施設や文化財と一体化した活用を目指していく必要があると考える。さらに、山野貝塚から出土する貝類が現在も採取できる盤洲干潟をはじめとする自然環境を含めた活用を検討することにより、山野貝塚でしか体験できない活用が生まれてくる可能性も考えられる。

参考文献

- 金子浩昌他 1958『館山鉾切洞窟の考古学的調査』早稲田大学考古学研究室
- 金子浩昌他 1964『富士見台（犬吠）貝塚』千葉県教育委員会他
- 祇園貝塚調査団 1970『千葉県文化財調査抄報第4集 祇園貝塚発掘調査概報』千葉県教育委員会
- 野村幸希他 1973『袖ヶ浦町山野貝塚』房総考古資料刊行会
- 小宮 孟 1979「魚類および貝類遺体」『千葉東南部ニュータウン7-木戸作貝塚（第2次）-』（財）千葉県文化財センター
- 石田広美 1980『君津広域水道用水供給事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 角山遺跡 深城遺跡 飯富遺跡 苗見作遺跡』君津広域水道企業団
- 金子浩昌・牛沢百合子 1980『貝塚出土の動物遺体』貝塚博物館研究資料3 千葉市加曾利貝塚博物館
- 金子浩昌・忍沢成視 1986『骨角器の研究 縄文篇Ⅱ』慶友社
- 實川 理他 1988『花山遺跡』（財）君津都市文化財センター
- 野口行雄 1988『蓮華寺遺跡』（財）君津都市文化財センター
- 山本哲也 1989「君津地方の土偶」『君津都市文化財センター研究紀要』Ⅲ（財）君津都市文化財センター
- 稲葉昭智 1990『千葉県木更津市市内遺跡群発掘調査報告書—伊豆島貝塚・宮脇遺跡—』
- 能城秀喜 1990「袖ヶ浦町宮ノ越貝塚について」『千葉文華』25 千葉県文化財保護協会
- 上守秀明 1993『袖ヶ浦市山野貝塚発掘調査報告書』千葉県文化財保護協会
- 西原崇浩 1994『嘉登遺跡・大竹古墳群』（財）君津都市文化財センター
- 松本 勝 1994『蓮華寺遺跡Ⅱ』（財）君津都市文化財センター
- 稲葉昭智 1995『大竹遺跡群Ⅳ—向神納里遺跡・上南原遺跡・狐谷遺跡・大竹古墳群—』（財）君津都市文化財センター
- 安藤道由 1995『台木A遺跡』（財）君津都市文化財センター
- 堀越正行 1995「中央窪地型馬蹄形貝塚の窪地と高まり覚書」『史館』史館同人会
- 山形美智子 1997『千葉県木更津市蓮華寺遺跡Ⅲ』（財）君津都市文化財センター
- 加納 実 1998『木更津市峰ノ台貝塚発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター
- 樋泉岳二・西野雅人 1999「千葉市矢作貝塚の動物依存体分析」『研究紀要』19（財）千葉県文化財センター
- 樋泉岳二・西野雅人 1999「縄文後期の都川・村田川流域貝塚群」『研究紀要』19（財）千葉県文化財センター
- 西野雅人 1999「縄文中期大型貝塚と生産活動—有吉北貝塚の分析結果—」『研究紀要』19（財）千葉県文化財センター
- 井上 賢 2000「永井作貝塚」『千葉県の歴史 資料編考古1』（財）千葉県史料研究財団
- 上守秀明他 2000「伊豆山台遺跡」『木更津市文化財集報』4 木更津市教育委員会
- 能城秀喜 2000「祇園貝塚」『千葉県の歴史 資料編考古1』（財）千葉県史料研究財団
- 梅本洋平 2002「宮ノ越貝塚の表面採集資料について」『袖ヶ浦市史研究』10 袖ヶ浦市郷土博物館
- 西野雅人 2004「(1) 貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古4』（財）千葉県史料研究財団
- 光江 章・井上 賢 2004「ハワードA. マッコード (Howard A. MacCord) 資料」『千葉県の歴史 資料編 考古4』（財）

千葉県史料研究財団

水嶋崇一郎他 2006 「縄文時代人骨データベース 3) 千葉県の遺跡 (堀之内、加曽利、曾谷など)」『東京大学総合研究博物館標本資料報告』第 61 号 東京大学総合研究博物館

吉野健一他 2006 『東関東自動車道 (木更津・富津線) 埋蔵文化財調査報告書 7 君津市三直貝塚』(財) 千葉県教育振興財団文化財センター

忍澤成視他 2007 『市原市西広貝塚Ⅲ』市原市教育委員会

西野雅人 2007 『千葉東南部ニュータウン 37—千葉市六通貝塚—』

小倉和重他 2010 「井野長割遺跡総括報告書」『平成 21 年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書 井野長割遺跡—第 17 次調査報告書・総括報告書—』佐倉市教育委員会

高田 博 2010 『木更津市土器崎遺跡』(財) 千葉県教育振興財団文化財センター

安井健一 2010 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財報告書 袖ヶ浦市上宮田台遺跡 2 (旧石器・縄文時代)』(財) 千葉県教育振興財団文化財センター

西原崇浩・田中大介 2009 『嘉登遺跡 (2)』袖ヶ浦市教育委員会

小澤清男 2011 「千葉県の独鈷石・独鈷石形土製品 (3) —追加報告ならびに形態分類と編年的予察—」『貝塚博物館紀要』第 38 号 千葉市立加曽利貝塚博物館

忍澤成視 2011 『貝の考古学』同成社

西原崇浩 2011 「山野貝塚 (角山遺跡第 2 次調査・伊丹山遺跡第 2 次調査)」『平成 22 年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書』袖ヶ浦市教育委員会

桐村久美子 2012 「第 5 章 山野貝塚第 3 次調査」『平成 23 年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書』袖ヶ浦市教育委員会

田中大介 2013 「第 5 章 山野貝塚第 4 次調査」『平成 24 年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書』袖ヶ浦市教育委員会

田中大介 2013 「第 7 章 山野貝塚第 5 次調査」『平成 24 年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書』袖ヶ浦市教育委員会

樋泉岳二 2013 「動物資源利用からみた縄文後期における東京湾東岸の地域社会」『動物考古学』30 動物考古学会

村田六郎太 2013 『加曽利貝塚』同成社

山田貴久 2013 『千葉県袖ヶ浦市角山遺跡』(公財) 千葉県教育振興財団文化財センター

田中大介 2014 「第 6 章 山野貝塚第 6 次調査」『平成 25 年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書』袖ヶ浦市教育委員会

田中大介 2014 「第 4 章 山野貝塚第 7 次調査」『平成 26 年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書』袖ヶ浦市教育委員会

樋泉岳二 2014 「貝類・魚類遺体」『大膳野南貝塚 第Ⅲ分冊—本文編—』千葉市教育振興財団他